

Japan  
Audio  
Society

# JAS

# journal

2020年3月1日発行  
通巻463号  
発行 日本オーディオ協会

2020

Vol.60 No.2

3

- 連載：「私の好きなこの一曲」 Vol.2 会長 小川 理子
- 高音質オーディオ IC ブランド「MUS-IC™」  
-音楽家が創り上げる、音楽の世界観を表現するために-  
ローム株式会社 LSI 事業本部 佐藤 陽亮
- 連載：「新会員紹介」 Wefield  
株式会社ウインテスト オーディオ事業部 野本 宗靖
- 【JAS インフォメーション】  
2019年度 第5回（2月） 第6回（3月） 理事会報告
- 編集後記 編集委員 春井 正徳



一般社団法人  
日本オーディオ協会



## C O N T E N T S

- 連載：「私の好きなこの一曲」 Vol.2 会長 小川 理子 3P
- 高音質オーディオ IC ブランド「MUS-IC™」  
-音楽家が創り上げる、音楽の世界観を表現するために-  
ローム株式会社 LSI 事業本部 佐藤 陽亮 5P
- 連載：「新会員紹介」 Wefield  
株式会社ウインテスト オーディオ事業部 野本 宗靖 12P
- 【JAS インフォメーション】  
2019 年度 第 5 回 (2 月) 第 6 回 (3 月) 理事会報告 15P
- 編集後記 編集委員 春井 正徳 16P

### 3月号をお届けするにあたって

桜の開花、満開も統計開始以来、最も早い地点が目白押しとなるなど暖かな 3 月を迎えております。1 月号の巻頭言で軽く触れた新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大は、その後 2 か月が経過して益々拡大し、本号をお届けする 3 月下旬には、中国に続いて欧米での“オーバーシュート”(爆発的感染拡大)が報告されています。早い時期から感染者の報告のあった我が国では、クルーズ船での船内感染が世界的にクローズアップされましたが、不要不急の外出の抑制、学校の閉鎖、卒業式の中止や簡略化、テレワークの推進、スポーツやコンサートのイベント自粛など“クラスター”と呼ばれる感染者集団の発生を抑えるべく、政府・関係機関が要請する緊急施策の効果が出つつあるのか、他の国、地域に比べ穏やかな感染者増加傾向で推移しています。とは言え、多くの方々を命を落とされる結果となっていることは、ただただ残念でなりません。謹んでお悔みを申し上げます。東京オリンピック・パラリンピックの開催延期も決まり、世界的な景気悪化もリーマンショック(2008 年)を超える規模との事で、先行きに不安が募る今日この頃です。次号(5 月号)をお送りするころには、事態の収束が見えていることを期待したいです。

さて、今号では小川会長の新連載「私の好きなこの一曲」を皮切りに、ローム(株)佐藤様による、同社の高音質オーディオ IC ブランドのご紹介をお送りします。連載の「新会員紹介」では新ブランド、Wefield を展開されている株式会社ウインテスト オーディオ事業部の野本様から記事を頂きました。

## 【連載：「私の好きなこの一曲」 Vol.2】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

「ある現代作曲家との出会い、ある現代作品の共創」

林そよかさんという、若手作曲家の現代作品を演奏させていただく機会に恵まれた。2020年2月、大阪いずみホールでのバレンタインコンサートだった。もともと、関西フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者 藤岡幸夫さんにお声がけいただき、オーケストラとの共演は今回で4回目だった。

最初はガーシュインのラプソディインブルー、2回目はバッハのピアノ協奏曲第1番、3回目もガーシュイン、そして今回4回目が現代作品のピアノ協奏曲、それも世界初演。2回目のバッハのコンチェルトも相当難産したが、今回の現代作品は、ジャズでもなく、新しい領域の面白い共創の世界であり、本番ギリギリまで表現へのこだわりがあった。世界初演でありお手本もなく、自分の表現そのものをオリジナルとして世に出すという創作であり、これまでにない体験だった。

自分で曲を作って弾くのと全くレベルが違い、これから未来を切り拓く才能あふれる現代作曲家のピアノ協奏曲第1番を音として実在させるという責任、作品を音楽として世に出し、弾き続けられる、聴き続けられる、その第1歩を担うという責任、ある意味、自分がその役割を果たすことの使命を感じながらこの1曲に取り組んだ。

そのタイトルは「Cosmos High」。

哲学的には調和という意味がある。作曲家の言葉をお借りすれば、Sky High とよく言うけれど、それよりももっと高く、まだ見ぬ宇宙まで皆でいってみよう、という。現代版新世界のような、新たな発見、ワクワクする未来、そんなキラキラしたものがつまっている。

通常、私の練習時間には制約があるため、林そよかさんには、完全に出来上がる前の段階でいいので、できた部分からスコアを送ってほしい、とお願いし、最初に送られてきたのが2019年8月。本番が2月なので、バックキャストで、12月初旬には難度の高そうな1楽章と3楽章をある程度暗譜して弾けていること、2楽章は弾きこなすというより表現力がポイントであり12月1か月で完了すること、年が明けて1月は自分の表現にするためにとにかく弾きこなし、アドリブソロの部分は本番ギリギリまで発想をオープンにしたままインプロビゼーションを重視する、これを目標とした。

私のやり方は、譜読みでは、主題、主題の周辺、装飾、などなど、最初にグラウンドデザインがどうなっているのかという、統合的な空間認識から入り、それを全体設計図として、次に個別のパーツを音にしていく。あくまでも全体イメージはぶらさない。



そのかわり、全体イメージのフレームの大きさは、最適だと思えるゆとりあるものにしておく。あまりに構想が大きすぎて最後にまとまりがつかない、ということにならないように、制約のある自由、安定感のあるクリエイティブ、を強烈に意識する。そして、常に自分の構築する世界は、「品格と完成度」においてベストを目指す。

こんなふうに言葉にすれば格好いいが、結局のところ、練習でしかない。小泉信三先生が「練習は不可能を可能にする」とおっしゃったが、全くそのとおりだと思う。土日の練習は長時間にわたり、心身ともに疲れ果てる。アスリートか修行僧かと思えるほどだ。コンサート本番が近づくと、早朝練習、深夜練習も必要となる。日中の会社の激務に加えての練習は、「なぜ自分はここまで頑張るのか」と自分に問いかけるほどだ。答えは「文化や芸術を作り出すことは、人類の最も崇高な使命の一つ」。そういうことに関わっていること自体が、自分にとって「Cosmos High」なのである。

そして、企業活動も、社会文化、生活文化、を創り出す仕事。どんなに大変でも、一人の人間として、その役割を一生懸命果たすということが「生きる、生かされる」ということ。

さあ、これからの未来、様々な共創が楽しみでならない。

## 高音質オーディオ IC ブランド「MUS-IC™」 -音楽家が創り上げる、音楽の世界観を表現するために-

ローム株式会社 LSI 事業本部

佐藤 陽亮

### 概要

オーディオ機器の音づくり同様、良い音を求めるには、IC チップにも「音質設計」が必要です。半導体メーカーであるロームは、IC の音質を追究し続けており、高音質を実現する新しいブランド「MUS-IC™」を立ち上げました。その理念と半導体ならではの取り組みを紹介します。

### ABSTRACT

To create better sound, “sound quality design” is required for IC chips as same as audio equipment. ROHM, a semiconductor manufacturer, has been pursuing the sound quality of ICs and launched a new brand 『ROHM Musical Device “MUS-IC”』 achieving high sound quality. In this article, I introduce our philosophy and the initiatives unique to semiconductors.

### 1. はじめに

ローム株式会社は、1958年に抵抗器を製造するメーカーとして京都に設立されました。その後、1969年にIC開発を開始し、1971年に日本企業として初めてシリコンバレーへ進出するなど、チャレンジ精神に満ちた半導体メーカーとして現在まで多くの方に支えられながら成長してきました。ちなみに、「ROHM」の社名は、創業当時の生產品目である抵抗器（Resistor）の頭文字「R」に抵抗値の単位 $\Omega$ 「ohm」を組み合わせたものです。「R」信頼性（Reliability）にも通じており、品質を第一とするロームのポリシーを表しています。

また、ロームは、ICからディスクリート製品まで、幅広い半導体製品を扱う企業でありながら、公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーションと共に、四半世紀以上にわたりクラシックを中心とした音楽文化の普及・発展に尽力している企業でもあります。若手音楽家への奨学援助においては、現在ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団で第1コンサートマスターを務める榎本大進氏をはじめ、480名の若手音楽家を支援。さらに、日本を代表する劇場「ロームシアター京都」を支援し、コンサートなどの主催や協賛を行っています。

右写真：ロームシアター京都にて  
「ローム ミュージック フェスティバル  
2019」におけるオーケストラコンサート



## 2. 「音質設計技術」を確立するきっかけ

ロームのオーディオ IC の歴史は約 40 年前からはじまります。ロームの企業目的には、「つねに品質を第一とする」「文化の進歩向上に貢献する」とあります。この企業目的は、制定されてから創業 60 周年を超えた現在に至るまで、社内にはしっかりと受け継がれています。この企業目的の下、多くのオーディオ IC が生み出されてきました。プリアンプ、オーディオアンプ、サウンド・プロセッサと呼ばれる音量調整や音質調整用の製品、携帯電話向けの音源用 IC やオーディオ CODEC に代表されるデジタル・アナログ混載品、CD-DSP やオーディオ用 SoC に至るまで、幅広く開発を続けてきました。

ロームのオーディオ IC 技術は、カセットテープの時代から、CD の時代を経て今日のハイレゾ時代に至るまで、良い音を求めて、電気的特性と向き合いながら進化してきました。時代の流れとともに、半導体は微細化の道を歩んできましたが、オーディオ IC も例外ではなく、微細化により集積度は向上し、1 チップで多くの機能を実現できるようになりました。その一方で、微細化によりオーディオの主特性であるノイズやクロストークに悩まされることも多くなりましたが、設計技術の向上もあり、オーディオ製品として十分な特性を確保し続けてきました。

しかしながら、「音質」については IC 設計エンジニアにとって曲者でした。なぜなら、「目標の電気的特性を達成すること」と「目標音質を達成すること」は必ずしもイコールではないからです。オーディオ機器のエンジニアであれば、「音質」は回路の設計だけに留まらず、基板設計、採用するコンデンサや抵抗などの部品選定、筐体の設計といった多くのパラメータを考慮して開発することは理解できると思いますが、実はこれらは IC 開発でも同様に考えるべきことなのです。IC 開発において音質に影響を与える要因を、ロームでは「音質パラメータ」と呼んでいますが、私自身のオーディオ用 IC 開発の中で、「音質パラメータ」を強く意識した出来事を紹介したいと思います。

それは、開発中のあるオーディオ IC をお客様に評価していただいた際、「音質が以前よりも悪くなった」と言われたときのことです。このとき私は、回路を一部変更したものの電気的特性は同等のサンプルを提出していたため、最初は疑念を抱きました。この理由は後に明確になりましたが、当時は回路上のわずかな変更点を中心に解析を行っても、納得の得られる結論を出すことができませんでした。その後、このような経験を何度も重ねる中で、IC の「音質パラメータ」は回路上の要因だけでは成り立たないということを実感することができました。これは、IC の「音質」もオーディオ機器と同様に考えなくてはならないということ強く認識した瞬間でもありました。ここから、私の中には IC の音質を向上させるには、何が効果的なのかを純粋に知りたいという探求心が生まれ、回路設計で気になる点はもちろん、後工程（ウエハ形成後の組立工程）の製造条件についても調査をはじめました。これが、ロームにおける「音質設計技術」を確立するための第一歩でした。

## 3. 「音質設計技術」を形づくる「28 の音質パラメータ」

それでは、ロームの「音質設計技術」を形づくる「28 の音質パラメータ」について説明します。図 1 は IC の製品開発におけるプロセスで、シリコンインゴットの引き上げから、チップ完成までを工程毎に示しています。前述したように、音質パラメータは IC の回路設計に留まらず、製品開発における一連のプロセスに存在します。なお、28 の音質パラメータには、過去の実験結果

を紐解いて特定したのから、あらたに仮説を立てて実験により導いたものまで様々なものがあります。これらのパラメータを特定していった結果、ICの「音質パラメータ」とオーディオ機器の「音質パラメータ」は、共通する部分が多いことが分かりました。

たとえば、左右対称に代表される基板レイアウトは、ICの素子レイアウトでも同様といえますし、抵抗やコンデンサなどの種類、特性による音質影響も同様の考え方を適用できそうです。また、オーディオ機器において筐体設計は非常に重視されますが、ICにおいても後工程（ウエハプロセス後の組立工程）で応用できることがあると考えています。このように、オーディオ機器の音質設計とオーディオICの音質設計は多くの共通点があるといえそうです。

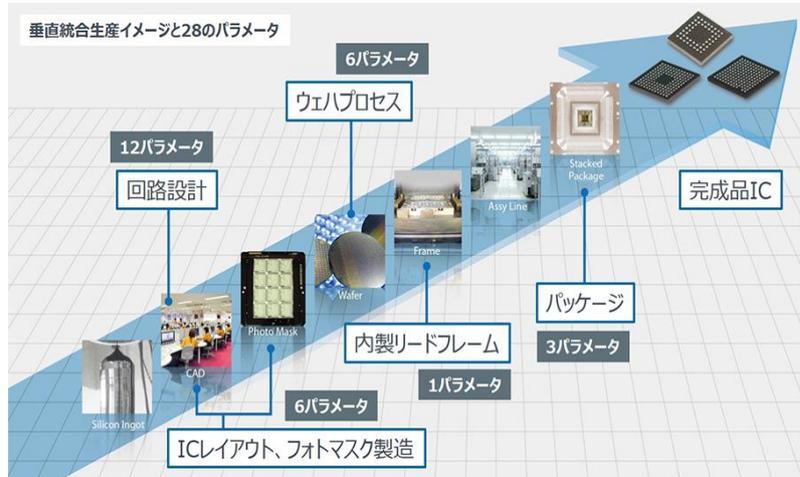


図1 ロームの垂直統合型生産のイメージ

ここで、「音質パラメータ」の具体的な事例をひとつ紹介したいと思います。

オーディオ製品の代表的特性のひとつにノイズ特性があります。全高調波歪率 (THD) とともに代表される電気的特性です。

このノイズ特性は、最も身近な音質パラメータと考えることができるように思いますが、ロームが考える音質パラメータは、単にノイズ特性のことを意味するものではありません。回路上のある素子で発生するノイズを独自の手法で制御することで、音質に対して十分な影響があることを確認できたものを音質パラメータと考えます。ここではオペアンプと抵抗、アナログスイッチで構成されるゲイン調整回路 (図 2-1) を例に、回路内の抵抗素子に着目して音質への影響を特定した事例を紹介します。下の測定結果 (図 2-2) は、回路上の抵抗素子の  $1/f$  ノイズ特性をあらわしています。20Hz~100Hz 程度の低域のノイズレベルに注目すると、改良前後で約 10 倍程度の差を確認できます。

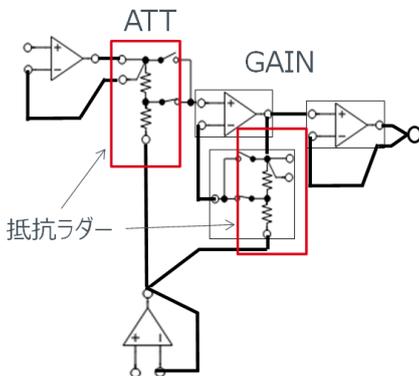


図 2-1 ゲイン調整回路

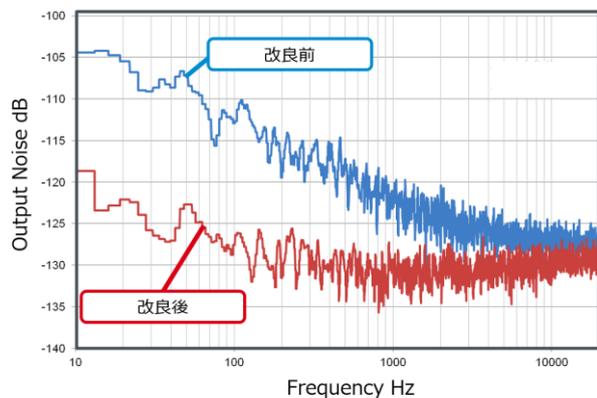


図 2-2  $1/f$  ノイズ特性の測定結果

この  $1/f$  ノイズ特性が音質との相関が高いと考える理由を説明します。一般的に、ゲイン調整回路のノイズ特性を評価する際は、無信号時のノイズ特性を測定します。この場合、ノイズレベルは抵抗素子の熱雑音が支配的となると考えられます。一方で、実際に音楽信号が再生されている状態、つまり動特性を考えた場合、ノイズ特性が音楽信号に応じてわずかに変化することを確認しました。つまり、この  $1/f$  ノイズ特性は、音楽再生時のある瞬間における抵抗素子のノイズ特性を表現していると考えられます。音楽信号は時間とともに変わっていくため、ノイズ特性も時間とともに変化していると考えられます。これは、音源のもつ情報量が時間軸上でその音楽信号に応じて連続的に変化する（ノイズに埋もれることで情報量は減少すると考える）ことと等価と考えています。結果として、この影響が音質を変化させる要因につながっていると考えています。

このように、28の音質パラメータは音質を変化させる要因ごとに特定され、これらを組み合わせることで狙い通りの音質を作り上げることが可能になります。特定した「音質パラメータ」は、様々なオーディオ IC における、音質の作り込みにおいて有効なものであると考えています。

#### 4. 「<sup>ミュージック</sup>MUS-IC™」への想い

私たちは、2018年8月にロームにおける高音質オーディオ IC ブランド ROHM Musical Device 「MUS-IC」(以下「MUS-IC™」: MUSICの文字を、音楽のための IC という意味をこめて、MUSと IC の間にハイフンを入れたロームの商標です)を立ち上げました。このブランドは、私たちロームの IC 設計エンジニアの熱い想いだけでなく、多くのお客様からのご期待、オーディオ業界からの注目などが合わさり、これから育てていく新しいブランドとしてスタートしました。ここでは、「MUS-IC™」のブランド理念をあらためて説明すると同時に、今後の展望について述べたいと思います。

最初に、このブランドを形作る上でかかせない4つのキーワードについて紹介します。



図3 「MUS-IC™」ブランドの4つのキーワード

1つ目は、創業時から不変でロームの企業目的でもある「つねに品質を第一とする」にあります。2つ目は、「垂直統合型生産」体制です。これらは、製品の信頼性確保において重要なキーワードでありながら、オーディオ製品の品質の根底ともいえる音質とも深い関係があります。それが先に述べた3つ目の「音質設計」への活用です。垂直統合型生産により、音質の作り込みは、

回路設計や IC レイアウト、ウエハプロセスに留まらず、後工程と呼ばれるウエハの組立工程でも活用可能になります。そして、4 つ目が「音楽文化への貢献」です。冒頭で説明したように、ローム ミュージック ファンデーションを通じて、ロームは音楽文化への貢献活動を積極的に行っており、社内に音楽、とりわけクラシック音楽を聴く機会が豊富にあります。そのため、ロームの IC 設計エンジニアは、本物の音を知り、その感覚を製品開発に活かすために、コンサートホールで生演奏を聴く機会を多く作っています。ゲネプロにも参加し、コンサートホールによる聴こえ方の違いも体感するなど、日々研鑽を積んでいます。

この4つが揃った半導体メーカーは、世界広しといえどもロームだけではないでしょうか。また、この4つのキーワードなくして「MUS-IC™」は成立しません。

なお、「MUS-IC™」をより深く知るための紹介サイトはこちらをご覧ください。

<https://www.rohm.co.jp/mus-ic/>

「MUS-IC™」は、高音質オーディオ IC のブランドであり、ロームが目指す「MUS-IC™」の理想像は次のとおりです。

「静寂な緊張感の中で奏者が弦を弾いた瞬間の空気感、音のエネルギーが凝縮された豊かな低音、心の琴線に訴えかけてくる声の響き、そして、それらを全身で感じたときの深い感動。音楽家が創りあげる、このような音楽の世界観を余すところなく再現したい」と考えています。

また、「MUS-IC™」ブランドに対応する製品を「オーディオデバイスとして要求される数値性能と音質をともに極限まで追究し、ロームのエンジニアの熱い想いを形にしたローム・オーディオ IC の最高峰」と定義しています。

そのため、ロームのオーディオ製品の全てを「MUS-IC™」として製品化することは考えていません。上記コンセプトに従い、「MUS-IC™」に相応しい音質とコンセプトを持つものだけに限定します。



図4 「MUS-IC」シリーズの製品定義

## 5. 高音質オーディオ IC (MUS-IC シリーズ) の紹介

最後に、「MUS-IC™」のコンセプトに基づいて設計された高音質オーディオ IC (MUS-IC シリーズ) を紹介します。

### (1) ハイエンド機器向け高音質サウンド・プロセッサ IC **BD34704KS2, BD34705KS2**

ロームでは 20 年以上に渡りサウンド・プロセッサ関連製品を開発してきました。性能面、品質面においても多くのノウハウを有しており、これらのコア技術に加えて音質設計を組み込んだことで、アナログボリュームの最大のメリットである、音量を絞った時においても音質が維持できる製品を開発しました。また、ゲイン (音量) 調整時に目標ゲインまで滑らかに遷移させることでポップノイズを低減するマイクロステップボリューム機能も搭載しています。オーディオ性能は全高調波歪率 0.0004%、S/N 131dB を実現しています。

### (2) 車載グレード高音質サウンド・プロセッサ IC **BD34602FS-M**

バッテリーでの動作を意識した単一電源仕様でありながら、信号系バイアス構成を一から見直すことで、高音質を実現した製品です。主にハイエンドのカーオーディオ、カーナビゲーションシステム、ディスプレイオーディオに最適です。また、これらのシステムで要求されるナビ音声入力、ハンズフリー応答などに最適な、独立 3 系統のミキシング回路も搭載しています。オーディオ性能は全高調波歪率 0.0004%、S/N 125dB を実現しています。

### (3) D/A コンバータなどに最適な高音質オーディオ用電源 IC **BD37201NUX**

電源 IC を構成する基準電圧源、エラーアンプ、外付けフィードバック抵抗などのノイズを低減し、出力ドライバー段の高速応答により負荷となるオーディオデバイスの電源ラインを安定にしました。高音質化のポイントは、低ノイズ+負荷デバイスの安定動作であり、ノイズ性能は  $3.3\mu\text{Vrms}$  を実現。オーディオ帯域のダイナミック性能に着目して設計された本電源 IC は、0.5A 以下の 1.8V、3.3V 電源のハイエンド D/A コンバータや 5V 以下のポータブルヘッドホンアンプの電源に最適です。

### (4) 高精度・高音質オーディオ用 D/A コンバータ (開発中)

ハイエンドオーディオ機器向けに開発したオーディオ D/A コンバータです。ロームのオーディオ D/A コンバータは、これまでに確立してきたアナログ回路の音質設計技術と、 $\Delta\Sigma$  型 D/A コンバータの要素技術であるデジタル信号処理(オーバーサンプリングやノイズシェーピングなど)の音質設計技術を融合して実現しています。D/A コンバータの高音質の定義は、「音楽家が創りあげる、音楽の世界観を余すところなく再現すること」と考えています。これは、メディアに記録されたデジタルデータの本来の音、つまりクラシック音楽であれば、コンサートホールで聴く音であり、スタジオ録音の音楽であれば、演奏家やレコード製作者の届けたい音といえるでしょう。それゆえに、IC 設計エンジニアの本物の音分かる経験が重要であり、ロームの音楽文化が製品開発に生きています。オーディオ性能もハイエンドに相応しい全高調波歪率 0.0002%、S/N 130dB を目指しています。



図5 MUS-ICシリーズのイメージ

### 筆者プロフィール

佐藤 陽亮 (さとう ようすけ)



2003年 横浜国立大学大学院修士課程修了、同年ローム株式会社入社。  
現在は、LSI事業本部センサ・プロセッシングLSI商品開発部にて、LSI  
設計開発業務のグループリーダーを務める。

入社時より、アナログ・サウンド・プロセッサICの開発に携わり、2014  
年頃からオーディオICの「音質設計」を担当。「MUS-IC™」ブランド  
の立ち上げとともに、音質責任者として高音質デバイスの開発に従事  
している。

新会員紹介

日本オーディオ協会入会のご挨拶

Wefield ウィンテスト株式会社 オーディオ事業部

野本 宗靖

概要

Wefield は 2019 年 10 月に日本オーディオ協会へ入会しました。そのご挨拶と今後の展望に関して述べる。

ABSTRACT

We, Wefield are the new audio brand that formed by Wintest Corp. in Yokohama, which is a professional Audio system team and enrolled in the “Japan Audio Society” last October. We started as a distributor for home audio part of amphion loudspeakers Ltd.

1. はじめに

この度、2019 年 10 月に「日本オーディオ協会」に入会をさせて頂いたウィンテスト株式会社オーディオ事業部の野本と申します。当社は本業界において新参者ですが、当社オーディオ事業部（以下「Wefield」）に在籍する者は、私を含め長年オーディオ業界に関わった経験を持っております。

最近の若者文化の中で音楽はやはり重要な「立ち位置」を確保しているにも関わらず、その文化の中に「オーディオ」と言う文字は見る事が出来ても、私の認識とは年々異なるものに変化をしました。当協会への入会を機に、オーディオマーケット、オーディオの歴史認識を新たにし、そして協会主催のフェア等へ積極的に参加を行い、会員の皆様との情報交換を通し、業界にご尽力されている先輩諸氏方々協会員の皆様とともに、オーディオ文化の活性化に向けて微力ながら奮闘致したく、そのような思いで入会させて頂きました。催事ある度、またお手をお借りする事もあるかと存じますが、どうぞ宜しくお願い致します。

2. 当社の活動について

ウィンテスト株式会社は 2018 年 6 月に「Wefield」を設立し、フィンランドの amphion loudspeakers Ltd.（以下「アンフィオン社」）の日本におけるコンシューマー向けの輸入代理店を務めており、同社のホームオーディオ部門のハイエンドスピーカーを輸入販売、そして国内におけるサポートを開始しました。当社はオーディオ業界への参入にあたり、まず重要な音の出口に着目し、代理店ビジネスから開始し、後々は自社ブランドによる音の入り口、そしてアンプ等、製品開発を行う事をミッションとし活動しております。

少しウインテスト株式会社の紹介をさせていただきます。当社は、神奈川県横浜市に本社を置き、半導体自動検査装置メーカーとして 1993 年に半導体検査、特にアナログ／デジタル信号が混在する IC や、カメラそしてスマートフォン等に搭載されるイメージセンサーの検査を得意としています。こんな会社がなぜ、オーディオ業界に進出したのか、と皆様思われるでしょう。2020 年現在の日本では半導体の工場が激減しています。多くの工場やメーカーはここ 10 年で殆ど台湾、中国に移ってしまい日本にはわずかに残る程度となり、当社のメイン市場もアジア方面に移ってまいりました。そのような中、国内向け新規ビジネスを模索した結果、当社のローノイズ技術や高い電子設計技術を活かせる事業として、オーディオ機器に参入することになりました。

しかし、オーディオ業界においては無名の当社、そこで海外有名ハイエンドスピーカーメーカーのアンフィオン社の力を借りようと同社 CEO の Anssi Hyvönen(アンシ・ヘヴオネン)氏と面談。そのスピーカーの音を聞いた瞬間、サイズ感を超越した豊かな低域、明瞭感とスピード感を兼ね備えたサウンド、ジャンル問わず現代でも昔の録音でも楽しく聴けてデザイン性に優れ、無類の音楽好きの私が虜になるのに時間は要りませんでした。幸いなことに私の経験を生かせる環境も整い、また素晴らしいスピーカーにもめぐり逢い、ご協力を頂ける諸先輩方にも恵まれ、公私ともに新たな道に漕ぎ出す機会と勇気を得ることができました。

私たちは、勿論、自身で猛烈なオーディオファンでありたいと思っており、また取り扱いをするメーカー様の製品の最大のファンになる事、そして、メーカー様と一丸となり、「設計、製造された方々の思い」が込められた「魂」への情熱を一滴もこぼさず忠実に、日本国内のオーディオファンの皆様に提供できるよう努めることが使命であると考えております。その実現のためには、ただ持ってくるのではなく、海外と日本の商習慣の違いを擦り合わせる事が重要であり、日本国内でより受け入れて頂くためには、どのようなブランドとして紹介すべきなのか、そして自分たちをどのようにブランディングすべきなのか、そして今後どのように業界に貢献していけるのか、メーカーや当社の技術者と日々話し合いを重ねています。お客様が安心して購入いただいた製品をお使い頂く事は勿論、海外のメーカー様が日本で商いを行いたい場合、Wefield に任せれば間違いのない、心配ないと思って頂きたいと一歩ずつ、そして時に猪突猛進で取り組んでおります。

2019 年の GDP 上半期は 1.8%前後、しかし後半は伸び悩み 1.6%の減であり、生活実感でも厳しい状況が続き、お客様の財布が固い中、市場にも大きな変化が生じております。特にインターネットの普及と高速化は、この 10 年オーディオ業界における消費行動の変化となって現れ、ハイレゾを始めとしたコンテンツのデジタル化も著しい時代となってまいりました。反面アナログの音質等に再注目が集まるなど、時代の変化にどう対応するべきであるのか、一人だけ(1社だけ)では難しい時代であるとも感じております。無類の音楽好きの私には世界の財産である音楽、そして見るだけでも楽しく洗練されたオーディオ機器をお客様にご紹介することで、皆様の日々の暮らしが少しでも豊かなものとなればという願望と、初めてオーディオに触れるような若い世代の皆様にも、新たな価値観を見出して頂ける、或いは仕事世代の皆様には、かつて音楽に

没頭したあの時間をまた、取り戻せるような取り組みも行いたいとも考えております。

個人的な見解ではございますが、35歳前後を境にオーディオ機器の概念がレコードプレーヤー、アンプ、スピーカー、真空管等の世代と、イヤフォン、ヘッドフォン（有線、Bluetooth）、DAPやスマートフォン等の世代と二極化しており、音楽のジャンルにも世代間での違いがあります。両世代の方々を橋渡しする様な役割が出来た時、弊社の付加価値や新しい価値への手がかりとなるのではないかと考えております。

### 3. まとめ

当社は日本オーディオ協会の会員として、一日も早く日本のオーディオメーカーの1社となれるよう努力するという最重要課題がございます。オーディオ協会、オーディオ業界の益々の発展に寄与出来る様、一生懸命邁進してまいりますので、宜しくお願い致します。

#### 筆者プロフィール

野本 宗靖（のもと むねやす）※写真右

PCAUDIO 黎明期先駆けとなった USB DAC 兼ヘッドフォンアンプ DR DAC シリーズやポータブルヘッドフォンアンプ imAmp 等、韓国 AUDIOTRAK の営業、マーケティング、ブランディング、サポートを担当。

立ち上げでは韓国 Audinst（代表製品 HUD-mx1 等）、フランス ELIPSON(PLANET シリーズ)、日本 NOBUNAGA LAB に携わる。（業務は同上）

その後、米国 GRADO のレコードカートリッジの日本市場への再投入や、ヘッドフォンの取り扱い英国 RHA の有線イヤフォン、Bluetooth イヤフォンの営業を含む業務全般の経験を経て、Wefield ウィンテスト株式会社では輸入から事業全般に携わり現在に至る。



**JAS Information**

**2019年度 第5回(2月) 第6回(3月) 理事会報告**

**第5回理事会**

第1号議案：新会員の承認を求める件

企業一社と個人二人の入会申請が報告され、原案通り承認されました。

- ・ 株式会社TM ネットワーク（賛助会員）

**運営会議**

(1) 2019年度決算見直し

・資料をもとに事務局から見通しが説明されました。前回理事会から法人会員の加入が続き、会費収入増により通期400万円強の黒字になる見込みです。

(2) 展示会についての報告

・資料をもとに事務局からOTOTEN2020の進捗について説明されました。従来12月の音の日に実施してきた音の匠顕彰を、今回のOTOTEN2020の期間中に行うことについて検討し、予算確保確認の意見がありました。

(3) ハイレゾロゴ付与制度報告

・資料をもとに説明されました。引き続き海外からの希望が多数を占めています。

(4) 委員会報告

・OTOTEN2020における音のサロン委員会活動内容等について説明がありました。

(5) 2020年度運営体制

・2020年度総会に向けての運営体制案について説明がありました。

(6) 2020年事業計画について

・2020年度の事業計画策定にあたり基本的な考え方について事務局から説明がありました。

**第6回理事会**

第1号議案：新会員の承認を求める件

個人二人の入会申請が報告され、原案通り承認されました。

第2号議案：2020年度事業計画案および予算承認の件

資料をもとに事業計画案および予算案が説明され、展示会の計画進行経過の理事会への報告について意見が出されました。また、会費収入前年比10%ダウンの予算組について慎重な読みを理解が得られ、原案通り承認されました。

**運営会議**

(1) 2020年度役員体制に関する報告

・総会事項になる役員交代にあたり、手順などについて事務局から説明がありました。会員の皆さまへは総会のご案内とともにレターで詳細をお知らせ致します。

(2) 2020年度展示会についての報告

・資料をもとに事務局からOTOTEN2020準備進捗について説明されました。

・新型コロナウイルスの影響による開催可否について判断基準や手順について確認しました。また、音の匠の選定が困難になるため、展示会での顕彰を一旦見送り、時期を再考することにしました。

## 編集後記

編集委員

春井 正徳

新型コロナウイルス、いつからかマスコミでの呼称が”COVID-19”に変わりましたが、世界中で猛威を振るっています。感染された方、あるいは様々な理由で待機期間を過ごされた方に、お見舞い申し上げます。

私は大阪在住なのですが、今年の冬は雪を見ずに終わったと思っていたら、お彼岸前の寒波で今シーズン初めて雪を見ました。異常気象と言える暖冬だったと思うのですが、そんなことはCOVID-19の陰に隠れてニュースになりません。従来型のインフルエンザも全く流行していない訳ではなく、亡くなっている方もおられると思うのですが、こちらもニュースになりません。COVID-19一色の状況です。音楽業界ではコンサートの多くが延期か中止となり、その代わりにアーティストが自分たちのパフォーマンスをネットで配信する、という活動が多くなされています。あまり大きな声では言えませんが、これらのネット配信を視聴するために、オーディオ機器を新たに購入したり、グレードアップしたりする方がおられることを期待したいところです。

3月号では、音にこだわり、音楽にこだわる、読み応えのある記事を掲載させていただくことができました。小川会長の「世界初演」のピアノ協奏曲演奏にかける熱意、ローム(株)佐藤様のIC内部でもオーディオ機器本体と同じように音質設計に取り組む真摯な姿勢、と何れもよい音、よい音楽を伝えるための皆様の情熱が伝わってくるものでした。ローム様の記事は、オーディオ機器メーカーとして部品のオーディオ性能については拘りたいけれども拘り切れないことが多い中、部品メーカーが部品の中でここまで音質設計を考えてくれているということは、オーディオ機器メーカーとしては頼もしいことです。

まだまだ COVID-19 の猛威は続くと思いますが、読者の皆様におかれましてはご自愛ください。

☆☆☆ 編集委員 ☆☆☆

(委員長) 松岡 文啓 (三菱電機 (株))

(委員) 大久保 洋幸 (NHK 放送技術研究所)・仲田 剛 (三菱電機 (株))

春井 正徳 (個人会員)・細谷 耕佑 (三菱電機 (株))・村田 明日香 (シャープ (株))

吉田 穰 (ティアック (株))・吉野 修一 (NTT 未来ねっと研究所 (株))

ご意見・ご要望・ご質問はこちらまで：[jas@jas-audio.or.jp](mailto:jas@jas-audio.or.jp)

発行人：小川 理子

一般社団法人 日本オーディオ協会

〒108-0074 東京都港区高輪 3-4-13

電話：03-3448-1206 FAX：03-3448-1207

URL：<http://www.jas-audio.or.jp>